

「始まり」のための後日談

旅の始まりの前に、あらかじめ読者にお話ししておかねばならないことがある。それは、この旅のすぐ「あと」に勃発した事態についてのことである。いうまでもない。コロナ・パンデミックだ。世界がこれほどまでに新型コロナウイルス問題に苛まれているというのに、ガラパゴスの旅など、福岡伸一はなんと脳天気な、あるいは不謹慎なことを言っているのか、とお思いの方もおられると思う。

今となつては言い訳に聞こえるかもしれないが、この旅が始まろうとする2020年3月のはじめ、世界はまだ正常に運行されていた。成田空港はいつもどおり混雑していたし、国際線はごく普通に発着していた。中国に端を発した新型コロナウイルスの問題は、クルーズ船「ダイヤモンド・プリンセス号」の集団感染や、隅田川の屋形船の乗客のクラスターなどが報道されてはいたが、これほどまで急速に世界を覆い尽くすとは、誰もがまだ予想だにしていなかった。私たちが向かおうとしていた北米と南米でも、この時点では、コロナ問題は完全に対岸の火事とみなされていた。

事実、私たちはごく普通に日本を出国し、何の問題もなく米国に到着し、ついでエクアドルに入国した。そして夢にまで見た旅、想像を絶する旅、ガラパゴス探訪が始まった。

事態が急変したのは、ガラパゴスの旅が終わった直後だった。

ガラパゴス探検を終えた私たち一行は、最後の島、サン・クリストバル島の空港からグア

ヤキル経由で、エクアドルの首都キトに戻った。空港で、通訳のミッチさんときよならの挨拶を交わしたあと、翌朝、乗継地の米国ダラス・フォートワース国際空港に着いた。米国入国も全くスムーズで、特別な検査や検温などは何もなくあった。私は、日本に戻るフォトグラフィアの阿部さんと別れ、ロックフェラー大学のあるニューヨーク行きの飛行機のゲートへ向かった。3月残りの春休みをニューヨークで過ごす予定だった。飛行機はその日の午後、ニューヨーク・ラガーディア空港に着き、イエローキャブを拾って、マンハッタンのアパートに着いた。道端には白い可憐なマメナシの花が咲きかけていた。ニューヨークの街に春を告げる街路樹だ。私は、ほっと一息をつきながら、荷解きをしたり、洗濯物を仕分けしたり、資料類をまとめたり、シャワーを浴びたりした。しばらくは旅の疲れをいやしたいと思った。それが2020年3月11日のことだった。

テレビをつけると、ニューヨーク郊外の小さな町ニューロシエルで、新型コロナウイルスの集団発生が起きたことを伝えていた。しかしこの時点では、きたるべき感染爆発の規模の大きさを私は全く予想できていなかった。翌日からあれよあれよといううちに、ニューヨーク州および全米で感染者の数が指数関数的に急上昇していった。数千から数万、そして数十万に達するのはあつという間だった。学校が閉鎖され、都市がロックダウンされた。ブロードウェイ、カーネギーホール、メトロポリタン美術館……ニューヨークの観光名所が次々と閉鎖し、レストランやバーも休業、不要な外出が禁止された。ロックフェラー大学も入構停止、研究もストップした。私はアパートに幽閉された。ほんとうに沈黙の春がやってきた。

一方、エクアドルでもたいへんな事態が^{しめつたい}出来ていた。

私たちが訪問したときは平和そのものだった。中国・武漢でのコロナ肺炎発生のニュースを受けて、首都キトの空港では、係員が発熱検査をする程度で、緊迫感や危機感は全くなかった。ガラパゴス諸島でも、最後の日に観光ボートに乗り合わせたイスラエル人とポーランド人のダイバーが、我々アジア人を見て、コロナ肺炎の軽口を叩いている程度だった。つまりみんな遠いどこかの国の他人ごとでしかなかった。ところがである。我々がエクアドルをあとにした直後から、感染者が猛烈な勢いで増加しはじめた。特に首都キトでは、低所得者が住む地域で医療崩壊をもたらした。収容できない感染者の遺体が路上に放置された写真が、通信社のニュースに乗って全世界に発信された。航空路が遮断された。

本土エクアドルから約1000キロ離れたガラパゴスも無事ではすまなかった。たくさんの観光客が流入してくるからだ。時事通信によれば、2020年3月23日、ガラパゴスで最初の4人の感染者が確認された。1人は旅行者、3人は島民だったが、みな本土の商業都市グアヤキルに滞在していた。エクアドルでは3月24日までに1082人の感染者が確認され、27人が死亡。エクアドル政府は3月16日からガラパゴス国立公園への旅行者立ち入りを禁じた。

つまり私たちは危機一髪だったのだ。もう少し旅程が遅かったらガラパゴスに入ることができなかった。あるいはエクアドル国内に足止めされて、国外に出ることすらできなかったかもしれない。

新型コロナウイルスは、私たちにウイルスと人間の関係を突きつけた。グローバリズムと



**オズワルド・チャピ
(愛称チャピ)**

ネイチャー・ガイド、元・ガラバ
ゴス国立公園管理局員。
物知りだが寡黙。
ホンモノのナチュラリスト
(タフ)。



**ジョージ・アヴィレス
(愛称ジョージ)**

マーベル号のcockさん。
すばらしい腕前。



**鳥居道由
(愛称ミッチ)**

通訳・旅のコーディネーター。
エクアドル生まれ・育ち。



阿部雄介

ネイチャー・フォトグラファー。
よい写真を撮るためなら
たとえ火の中、水の中。



福岡伸一 ハカセ

この旅日記の筆者。
“私”。
生物学者、自然のすべて
を愛するナチュラリスト
(しかし実はひ弱な
ナチュラリスト)。



**エドアルド・コセロ
(愛称ヴィコ)**

マーベル号船長。
頼りがいのある海の男。



**フランシスコ・
サンティリヤン
(愛称グァーボ)**

マーベル号副船長。
操船技術は抜群。



**フリオ・モレータ
(愛称フリオ)**

マーベル号船員。
よるず雑用係。
よく働く若者。

感染症の問題を提起した。人命尊重と経済活動のジレンマを露呈させた。そしてなによりも、目に見えないウイルスの振る舞いは、生命とは何か、という本質的な哲学的問いを私に再考させた。

ウイルスとは電子顕微鏡でしか見ることでできない極小の粒子であり、生物と無生物のあいだに漂う奇妙な存在だ。生命を、自己複製を唯一無二の目的とするシステムである、と利己的遺伝子論的に定義すれば、宿主から宿主に乗り移って自らのコピーを増やし続けるウイルスは、とりもなおさず典型的な生命体と呼べるだろう。しかし生命をもうひとつ別の視点から定義すれば、そう簡単な話にはならない。それは生命を、絶えず自らを壊しつつ、常に作り変えて、エン트로ピー増大の法則に抗いつつ、あやうい一回性のバランスの上に立つ動的なシステムである、と定義する見方——つまり、動的平衡の生命観に立てば——代謝も呼吸も自己破壊もないウイルスは生物とは呼べないことになる。しかしウイルスは単なる無生物でもない。ウイルスの振る舞いをよく見ると、ウイルスは自己複製だけしている利己的な存在ではない。むしろウイルスは利他的な存在である。

利他性は、動的平衡と並んで、私の生命観のキーワードでもある。生命の進化は利他性の上に成り立っている。それゆえ、はからずも勃発した新型コロナウイルスの問題は、本書ガラパゴスの旅の通奏低音とも深く重なってくることになった。

読者のみなさんにはこのあたりが伏線になることを予告しつつ。まずは『生命海流』の物語にお付き合いいただきたい。

マーベル号船長ヴィコ、副船長グアールポ、船員フリオ、料理人ジョージ。ボートで迎えにきてくれたのは、グアールポ副船長で、デッキで迎えてくれたのが、船長ヴィコだった。みんなたくましく南米の海の男。

さて、それではまず読者のみなさんにマーベル号の船内をご案内しよう。

図1と図2に、ビーグル号とマーベル号の平面図・断面図を示した。ビーグル号は全長27・5メートル、排水量242トン、乗員74名。立派な軍艦である。対する我がマーベル号は全長13メートル、排水量40トン、乗員8名。ざっと6分の1の規模でしかない小型船。おそらくドリトル先生のカーリユー号も、マーベル号と同じような規模だっただろう。だから私はかえって嬉しかった。これで私もスタビンスくんになった気分だ。

私は船尾の4号室を船室に使わせてもらうことにした。2人部屋のシングルユースである。なのでとりあえず個室を使わせてもらえることに安堵した。とはいえ部屋はごくごく狭い、細い二段ベッドと、わずかな空間。下段のベッドにスーツケースを置き、隙間の空間にリュックやら靴やらを置き、シャツやウェアを壁にかけ、上段のベッドに登って、枕元にノートやら資料やらメガネやらを置けばもういっぱいいっぱいである。上段のベッドの上の天井は低くて、背を起こして座ろうとすると頭がつかえる。じつと寝そべるくらいがやっとで、柵も何もないので下手に寝返りを打てば、ベッドから転落してしまいそうである。下段のベッドはもつと狭くて暗い。この部屋を2人で使わなければならなかったと

したら、さぞかし窮屈だったことだろう。2人分の荷物は置きそうもなく、プライバシーのプの字もない。おならのひとつもできそうにない。

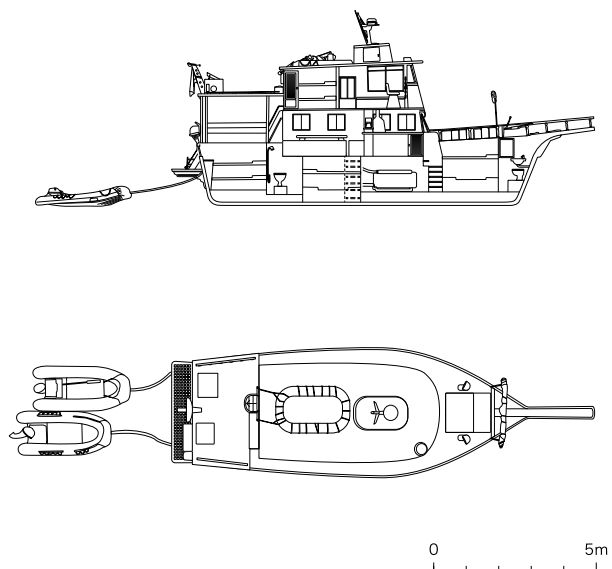
唯一の救いは、上のベッドに横たわると、その壁に横長で角が丸くなった小さな「舷窓」がついていることだった。これって、ドリトル先生航海記のスタビンスくんと同じだ。この窓からないだ海や、朝のガラパゴスの鳥影、溶岩台地の岩肌、あるいは静けさに満ちた暗い湾を眺めることになった。

私たちの船室は船の一番下層（1F）に位置している。私の部屋を含めて、左右に4室の客室（それぞれ二段ベッド付き）、2つのトイレ（このトイレのリアルについては別項「ログスvs.ピュシス」95ページ参照のこと）、それからエンジンルームがある。急階段（最初は必ず一度は踏み外したり、頭を打ったりする）を上ると、リビングルームがある。大きなテーブルのまわりにコの字に座れるようになっていて、私たちは毎日、ここに集って食事をした（食卓を囲むひとときが、いかに私たちの過酷な旅の救済となったかも、別項「ジョージのキッチン」159ページで詳述する）。座席の下は物入れになっていて缶詰やジュース類がしまっている。とにかく狭い船の中ではあらゆるスペースが有効活用されているのだ。このテーブルの上では、また地図を広げたり、顕微鏡観察したり、本を読んだりすることもできる。

このリビングルームの船首側にはキッチンがあり、大きな冷凍冷蔵庫が置かれている。キッチンは料理担当のジョージが陣取り、私たちにすばらしい料理を振る舞ってくれた。

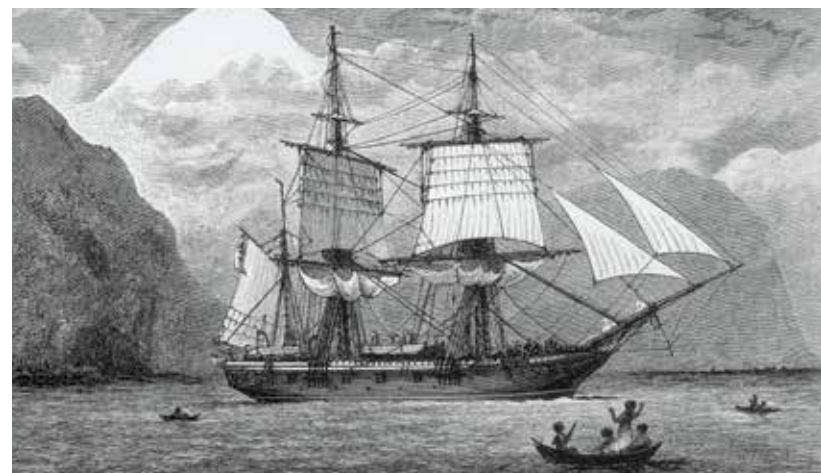
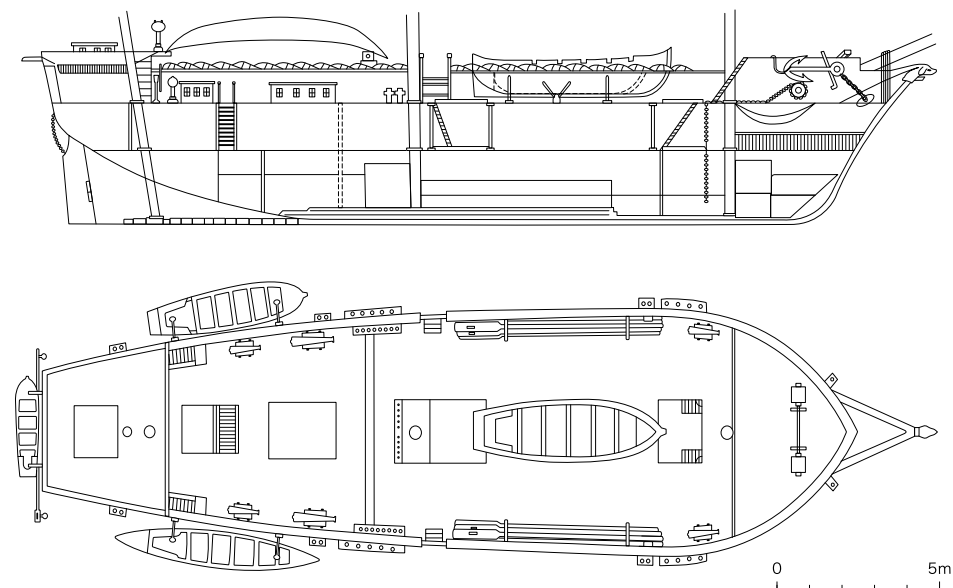
〔図2 マーベル号の構造〕

全長：13メートル／排水量：40トン／全幅：4メートル



〔図1 ビーグル号の構造〕

全長：27.5メートル／排水量：242トン／全幅：7.5メートル



この小さなキッチンであらゆる調理をこなし、ケーキまで焼いて、おまけに毎回のあとかたづけまで完璧にやってくれたことは、ただただ感嘆と感謝しかない。

キッチンの奥を一段さがると、ちょうど船首の下にもうひとつ三角形の部屋があり、ここがこの船の一番いい客室となる。左右に二段ベッド、奥に専用のトイレ。ここは今回の旅で一番の大荷物、機材満載のフォトグラフアー阿部さんに使ってもらうことにした。でもこの部屋は船の先端にあるので、揺れが激しく、また窓もないので（波をまともに食らってしまう）やや閉塞感もある。阿部さんは閉所が嫌いだといって、この部屋はもっぱら機材置き場となり、自分はリビングルームの座席で横になつて夜を過ごしたそう。

カメラマンは、いつなごき、撮影のチャンスやシーンが訪れるかわからないので、その習性上、窓のない部屋に籠もって寝たれていくわけにはいかないのだ。おかげで、阿部さんは、ガラパゴスの日の出、日没、星と月、船のそばにやつてきたコバネウの見事な狩人ぶり、その他、数々の決定的瞬間をフラインダーにとらえてくれた。

また最近のカメラとその周辺機材はやたらと電気を食う。おまけに阿部さんはドローンまで持ってきてくれたので、毎日、夜はタコ足配線をしてそれぞれの機器のバッテリーに充電を怠らなかつた。また、その日に撮影した映像は、必ずカメラの記憶媒体からPCのハードディスクにバックアップをとることも必須の作業なので、私が疲れ果ててベッドでバテているあいだにも彼は忙しく立ち働いてくれていたに違いない。ちゃんと寝ていたのだからか（そのかわりと言つてはなんだが、旅のあとは、私の番となり、こうして必死に旅の記録を書き起

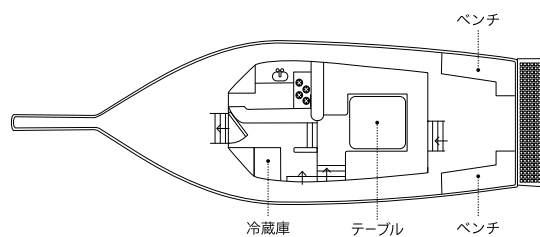
していかなければならないのだが）。

リビングから外に出ると、船べりの通路を通つて船首と船尾に出ることができる。船首に出ると水や燃料タンクが並ぶちよつとしたスペースがあり、そこに腰掛けると船の進行方向を見渡しながらか、海風に吹かれることができる。とても気持ちがいい。私たちはここで海を眺め、船と並走して泳ぐアシカと遊んだり、マストについて一緒に飛んでくれるグンカンドリに声をかけたり（ガラパゴスの生き物たちはほんとうに人間を恐れず、むしろ人間に興味をもつて近づいてきてくれるのだ）、何もない水平線に沈む壮大な夕焼けを見たり、満天の星と天の川を見上げたり、あるいは赤道を通過した瞬間にビールで祝杯を上げたりした。そのときどきの感慨と感激については、この日記でおりおり触れていくつもりである。

船尾側に出るとこの船の乗り込み口がある。一段さがつてデッキがあり、ここから上陸用のゴムボートに乗り移る。ゴムボートは2艘がロープで係留されている。マーベル号が勢よく進むと、2艘のゴムボートは、忠実な家来のように左右を護衛しながらついてくる。それはなんだかスター・ウォーズの宇宙船みたいでもある。なぜゴムボートが2艘必要なのか、それもおおいおいわかることとなる。

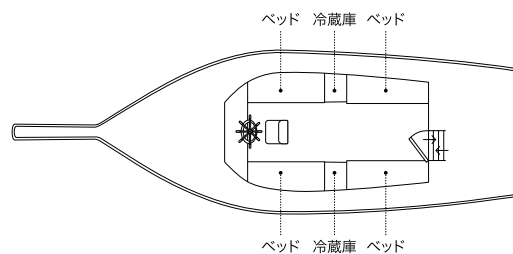
乗り込み口スペースから船側に階段がついており、リビングルームのちやうど真上に操舵室と船員たちの居室がある。居室といっても、操舵室にソファ兼用のベッド2台、連結した部屋の両側に質素な二段ベッドが設えてあるだけだ。今回の強行スケジュールでは、マーベル号は夜のあいだに島と島のあいだを航行することも多く、舵はヴィコ船長の他、

2F



ジョージのキッチン(左)と、リビング・ダイニング(右)。白い座席の中に食料品が保存されている。

3F



操舵室(ブリッジ)兼船長室



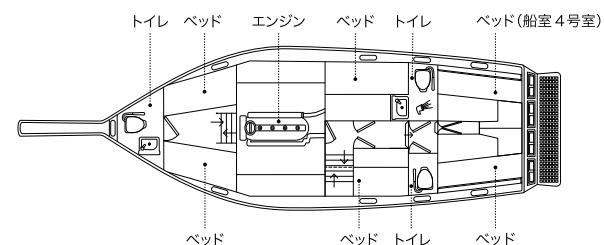
乗組員用ベッド

【図3 マーベル号の船内】

3階層構造。最下層の1Fが主に客室やトイレ・シャワー、2Fはリビングなどの共同スペース、3Fが船員たちのエリア。



1F



エンジンルーム



トイレ、シャワーの様子



私の部屋(船室4号室)

グアール副船長、フリオ船員が交代で担当してくれていた。なので彼らはここで寝ていた。料理人のジョージ、通訳のミッチもこの大部屋を使っていた。それに現地ネイチャー・ガイドのチャピ。彼らはみなスペイン語を母語とするアミーゴだ。いつも夜遅くまで船尾のスペースに腰を掛けて楽しそうに会話していた。私たちはその輪に入っていくことはできない。

船の乗組員と私たち客人とのあいだにはわりと厳密な暗黙の線引がなされていた。寝泊まりする場所はこのように船の上と下。食事のときも、テーブルを囲んで着席できるのは、我々客人と船長ヴィコだけ。あとの乗組員はみなキッチンで立ったまま食事をした。

我々が乗り込むと、マーベル号はすぐさまエンジンを噴かせて出航した。深夜1時過ぎ。暗いアヨラ港をあとに暗闇の海に出た。

どれくらいの速度だろうか。

ベッドの脇の小窓から波の音が聞こえる。私は狭いベッドに身体を横たえて低い天井を眺めた。旅は始まった。夕方少し仮眠しただけだったので、まもなく私はまどろみの中に落ちていった。波を切る音が夢の中に混じり合っていた。

*
*

ロゴスvs.ピュシス

『ビーグル号航海記』でも『ドリトル先生航海記』、あるいはハイエルダールの『コン・ティキ号探検記』でも、いずれも、この問題についてはきちんと明記されていない。しかし、どんなにかつこよく船に飛び乗って、荒波に対峙する冒険の航海に乗り出したとしても、避けては通れない生命のピュシスがある。ピュシスとは自然そのもののことである。ピュシスとは、ロゴス（言語⇨論理⇨構造）と対極にある生命そのものの広がり、自然のありのままの姿のことであり、まさに、私が、このガラパゴスの旅を通じて、見つめ直したい核心的なテーマである。生理学 (physiology)、内科医 (physician)、物理学 (physics)、これらの言葉の接頭辞の physi-とは、まさにピュシス (physis ⇨発音によってはフィシス) というギリシャ語を語源としており、それはつまり世界のそのままの相、天然あるいは自然、ということである。

ピュシスの全体像は、ロゴスの枠組みからこぼれ落ちやすい。なぜならロゴスは、人間の脳が、世界を切り取り、線分を引き、論理を抽出して、都合よく構築した、整った人工物だからである。この点は、本書の別の項でも本格的に考察していくつもりだ。

ここでは、ダーウィンもドリトル先生もハイエルダールもちゃんと言語化できていないピュシ

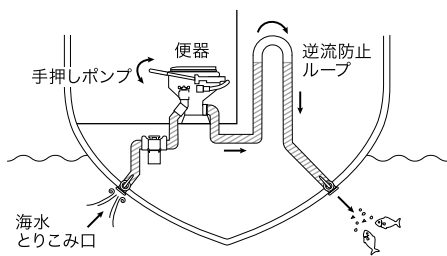
スについてぜひ一言、触れておきたいのだ。と、大上段に振りかざしてしまっただが、生命のもつとも端的なピュシス＝自然といえば、それはつまりトイレ事情のことである。

今、あらためて、『ビーグル号航海記』の扉に掲げられたビーグル号の見取り図を細見してみたが、どこにも toilet や bathroom の記載はない。でもそれは必ずあったはずだ。船の片隅の隅の暗がりのどこかに。いくつも並んで。しかもビーグル号には70名を超える荒くれ男たちが乗っていたので、いつもトイレには誰かしらが籠もっていたはずだし、その必然の帰結として、常時、汚物の飛沫やなんやらでぐじゃぐじゃに汚れ、すえた悪臭がこもっていたに違いない。想像するだに恐ろしい。しかし、これこそピュシスなのである。名家出身のダーウィンがよくそのリアルに耐えられたなあと感じる。

なので、今回の旅の、嘘偽りのないピュシスについてここに明確な記録を残しておくことは、生物学者として、そしてナチュラリストとしての私の責務であると考えたものである。

92ページの「図3 マーベル号の船内」をご覧ください。これがマーベル号の平面図である。この図に示したとおり、こんな小さなマーベル号（乗員8名）でさえ、トイレは3つもついていた。しかしこれですらしばしば混雑した。つまり絶えず先客がいた。入ろうとすると鍵がしまっているのだ。そのショックはわりと大きい。大体において、同じ船で同じ生活をし同じものを食べる人間のバイオリズムは同じなのだろう。なので、私はなおさらビーグル号がいったいどうなっていたのか心配である。

さて、マーベル号のトイレは、いずれもほんの小さな小部屋でメートル四方もないくらいだった。飛行機のトイレを思い起こしてもらえばよい。あれと同じかせいぜい一回り広いくらいだ。そこに丸い便器が備え付けられており、円形の便座がついていた（左図参照）。便座がついているだけマシだったかもしれない（サン・クリストバル島のキッカー・ロックに行ったときのボートのトイレは暗く、床面は正体不明の液体でぐっしり濡れており、ドアがきちんとしまらず、おまけに便器に便座がついていなかった）。ただ、マーベル号のトイレ室には小さいとはいえ、外が覗ける小窓がついてい



[マーベル号の便器(上)とトイレの仕組み図(下)]